

道元禪師真筆『正法眼蔵嗣書』収蔵記念

『正法眼蔵』と道元禪師の教え

師から弟子へ

嗣書

観音導利奥聖宝林寺

佛佛からうし佛佛小嗣法三祖祖からう
 ち祖祖小嗣法すた、この証契しりて、この
 單傳ちりて、これにて小無上菩提ちりて佛
 かあらしりて佛を印證すれふあたくし
 佛以印證をえとて、これを佛とてうたぐとて
 佛ふあらしりてをちりて、これを家尊
 ちりて、これを無上ちりて、これを印すれふあたくし
 佛以印證をうたぐとて、無師獨悟すれち
 無自獨悟も、ちりて、このゆゑ、佛佛證嗣
 三祖祖證契しりて、この道理は、宗

寛元元年九月二十四日掛錫於越州吉田縣
 古峯古寺草庵

嗣書

佛佛か

『正法眼蔵嗣書』本文冒頭と末尾部分

平成 20 年

6月9日(月)～7月25日(金)

展示解説リーフレット

駒澤大学禅文化歴史博物館

The Museum of Zen Culture and History, Komazawa University

〒154-8525
 東京都世田谷区
 駒沢 1-23-1
 TEL(03)3418-9610
 FAX(03)3418-9611



<http://www.komazawa-u.ac.jp/cms/zenbunka/>

ごあいさつ

『正法眼蔵』は、日本曹洞宗の祖・道元禅師（1200-1253）の代表的な著作です。「仏法の真髓をあまねく包蔵せる書」といった意味があり、道元思想の集大成として、また日本曹洞宗の根本宗典として今日に伝わっています。

このたび当館に収蔵された『正法眼蔵嗣書』は、『正法眼蔵』のうち『嗣書』の巻の真筆本です。真筆の『正法眼蔵』そのものが稀少ですが、本資料は冒頭から末尾まで欠けることなく完備している真筆『正法眼蔵嗣書』として、極めて貴重な資料です。本資料が、曹洞宗の学問所「旃檀林」に端を発する本学に収蔵されたことは、実に勝縁であり、喜ばしい限りです。

今回の企画展では、『正法眼蔵嗣書』の収蔵および公開を記念し、関連資料とともに、道元禅師が説いた教えを紹介します。

本資料の公開が、道元研究の一助となり、さらに多くの方々に禅文化への理解を深める機会となるなら幸いです。

また、円満山広徳寺（臨済宗・東京都練馬区）の格別のお計らいにより、若年の道元禅師が延暦寺で記したと伝わる『法華玄義釈籤問答抄』（仮称）も併せて公開されます。広徳寺様をはじめ、今回の企画展に際して、ご協力を賜りました関係各位に篤く御礼申し上げます。

平成 20 年 6 月 9 日

駒澤大学禅文化歴史博物館 館長 伊藤 隆 壽

協力者（敬称略）

寺院・団体 大本山永平寺・大本山總持寺・円通寺・香積寺・興聖寺・広徳寺・神応寺・
瑞雲院・青龍寺・禅定寺・大乘寺・永光寺・陽松庵・出光美術館

個人 河村孝道

企画展示室1 道元禅師真筆『正法眼蔵嗣書』～50年ぶりの発見～

この度、当館で収蔵された『正法眼蔵嗣書』は、古くからその存在が知られている貴重な真筆本の一つでしたが、昭和20年代から所蔵不明となっていた幻の真筆本でした。

企画展示室1および2では、五十数年ぶりに世に姿を現した『正法眼蔵嗣書』をはじめ、その関連資料、また広徳寺所蔵(臨済宗・東京都練馬区)の伝真筆資料を紹介します。

※『正法眼蔵嗣書』の詳細な解説については、別冊の解説冊子をご覧ください。

正法眼蔵嗣書 (しょうぼうげんぞうししよ)

縦 23.6 cm・横 14.4 cm／寛元(1243)年／粘葉装 32 葉・雁皮紙／当館蔵

冊子本一冊で、余白を含め 32 葉から成り、紙は経典類に用いられる雁皮紙(がんびし)を使用しています。表紙の古金襴表装は、伊予松平家所蔵時代の改装と思われます。

正法眼蔵嗣書の外箱 (しょうぼうげんぞうししよのそとばこ)

縦 27.3 cm・横 18.1 cm・高 5.2 cm／江戸時代／当館蔵

表に「曹洞宗開山道元和尚真蹟」、裏に「随世」(＝畠山牛庵、はたけやまぎゅうあん)とその花押が金泥で記されています。漆塗りの杉箱で、折紙や添状と同時期に作られたものと思われます。

畠山牛庵の折紙と添状 (はたけやまぎゅうあんのおりがみとそえじょう)

(折紙) 縦 39.0 cm・横 53.0 cm／寛文 3(1663)年／奉書紙／当館蔵

(添状) 縦 31.6 cm・横 45.2 cm／寛文 3(1663)年／楮紙／当館蔵

修訂本『嗣書』に添付されている極め書き(鑑定書)。寛文 3(1663)年 9 月に古筆鑑定家・畠山牛庵(随世とも号す)が記したもので、『嗣書』が道元禅師の真筆に疑いない旨が記されています。また添状の方には、真筆に疑いない旨に加えて、『嗣書』の価格は 200 貫文(50 両)ほどであると評価しています。

法華玄義釈籤問答抄 (ほっけげんぎしゃくせんもんどうしょう) (仮称)

縦 34.0 cm・横 21.0 cm／鎌倉時代(13 世紀)／広徳寺所蔵

臨済宗大徳寺派の広徳寺(東京都練馬区)には、比叡山延暦寺で修行中の、すなわち禅宗に身を投じる前の道元禅師の筆跡が伝えられています。

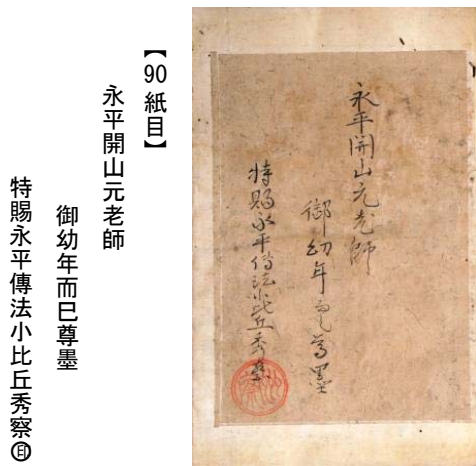
『法華玄義釈籤』は、中国天台宗の根本原典である智顛(ちぎ, 538-597) 撰の『法華玄義』を、智顛の六世の法孫湛然(たんねん, 711-782)が注釈した書。日本でも延暦寺など天台宗寺院において講義や論義がなされ、その際の間答が記録されました。本資料は、その問答の記録を抄出し、手習いとして書写したものと思われます。

折本一帖で、表裏に計 90 紙が貼り付けられています。表裏それぞれの末尾には、永平寺 22 世佛山秀察(佛山徳照禅師, 在任 1619-1634)の識語があり、江戸初期には、すでに真筆として伝承されてきたことがうかがえます。

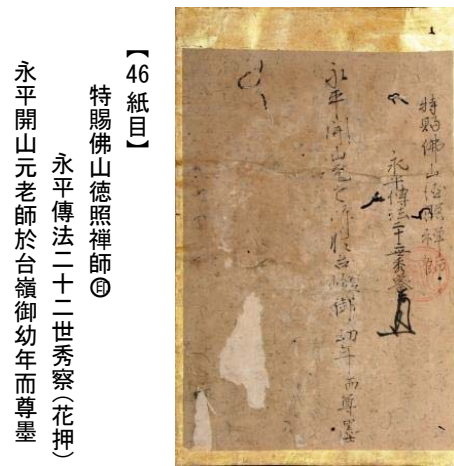
また、面山瑞方の極め書きや譲渡証文などが添付されています。



法華玄義釈籤問答抄(仮称) (左)表紙(「元古佛」は「道元古佛」の意)
(右)冒頭部分



【90紙目】
永平開山元老師
御幼年而已尊墨
特賜永平傳法小比丘秀察◎



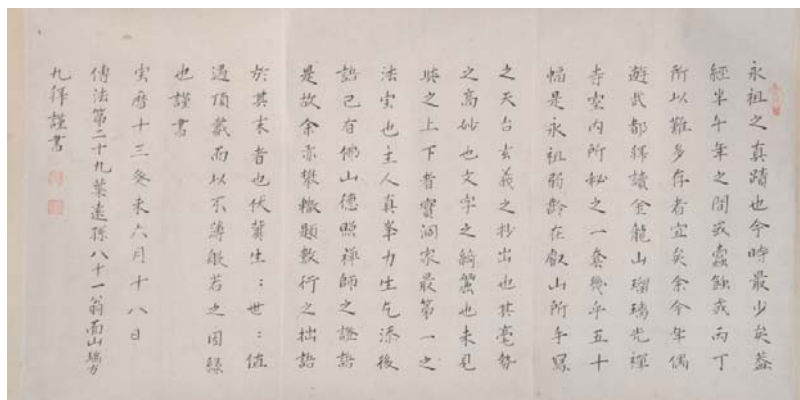
【46紙目】
特賜佛山德照禪師◎
永平傳法二十二世秀察(花押)
永平開山元老師於台嶺御幼年而尊墨

永平寺 22 世佛山秀察の識語

面山瑞方の極め書き (めんざんずいほうのきわめがき)

縦 29.2 cm・横 54.5 cm / 宝暦 13(1763)年 / 広徳寺所蔵

本資料に付されている面山瑞方(1683-1796)の極め書き(鑑定書)。面山瑞方は曹洞宗の僧侶で、『正法眼蔵』の参究をはじめとする宗学者でもあります。この極め書きは、面山瑞方が宝暦 13(1763)年に記したもので、道元禅師の筆跡が 500 年の時を経て伝えられてきたことを讃え、その筆勢を「高妙」、その文字を「綺麗」と評しています。



面山瑞方の極め書き

企画展示室2 祖師のすがた～佛佛かならず佛佛に嗣法～

道元禪師は『嗣書』において、「佛佛かならず佛佛に嗣法し、祖祖かならず祖祖に嗣法する、これ証契なり、これ単伝なり…」という言葉から起筆しています。すなわち「仏法の継承は、必ず仏から仏へ、祖師から祖師へと伝達相続されるもの」という意味で、『嗣書』の核心ともいえる言葉です。

企画展示室2では、釈尊以来脈々と師から弟子へ伝えられた仏法について、仏祖のすがたを描いた絵画から紹介します。

禅宗祖三国伝東歴代御真影（ぜんしゅうそさんごくでんとうれきだいごしんえい）

縦 133.0 cm・横 63.0 cm／明治 34(1902)年／紙本木版彩色／本学図書館蔵

仏教の開祖・釈迦牟尼仏(釈尊)と、その教えを伝えてきた三国(インド・中国・日本)の祖師たち 56 人を描いた掛軸。仏法が釈尊から、脈々と継承されてきたようすが一覧できます。

最下段には、道元禪師の師・如浄(にょじょう)と、道元禪師(高祖)―孤雲懐奘(こうんえじょう)―徹通義介(てつとうぎかい)―瑩山紹瑾(けいざんじょうきん, 太祖)―明峯素哲(めいほうそてつ)―峩山韶碩(がざんじょうせき)にいたる日本の曹洞宗の祖師たちを載せます。明治 34(1902)年、道元禪師の 650 回遠忌に際して作成されたものです。



禅宗祖三国伝東歴代御真影

芦葉達磨図（ろようだるまず） 卍山道白賛

縦 92.5 cm・横 26.0 cm／江戸時代(17-18 世紀)／紙本淡彩／当館蔵

禅宗は釈尊から数えて 29 代目の達磨を初祖とします。達磨には多くの逸話があり、古来、初祖達磨のさまざまな図像が描かれてきました。

芦葉達磨図と呼ばれるこの図は、インドから中国にやってきた達磨が、梁の国の武帝(464-549)に禅を説いたが、機縁がないと知り、揚子江(長江)を渡り北魏へ向かった時、一葉の芦に乗って渡江したという伝説に基づいた図です

画者は不詳ですが、上部に記された文字(賛)は、曹洞宗中興の祖と仰がれる禅僧・卍山道白(まんざんどうはく, 1636-1715)が記しています。



芦葉達磨図

企画展示室3 嗣法の証明～佛の印証をうるとき～

道元禅師は、『嗣書』の次の段落で、「佛の印証をうるとき、無師独悟するなり、無自独悟するなり…」、すなわち「仏法継承の証明を得るときは、自己と師が一体となるので師無くとも悟り、自己を忘れてただ悟りを得る」と、嗣法の極意を説いています。続いて、釈尊以来、脈々と仏法が継承されてきたことを説き、「この仏道、かならず嗣法するとき、さだめて嗣書あり。もし嗣法なきは天然外道なり。」と、嗣法と嗣書の一如なることを明示しています。

企画展示室3では、師から弟子へ仏法が伝えられる際に実際に用いられた資料を紹介します。

※展示室内の展示資料・掲示資料について

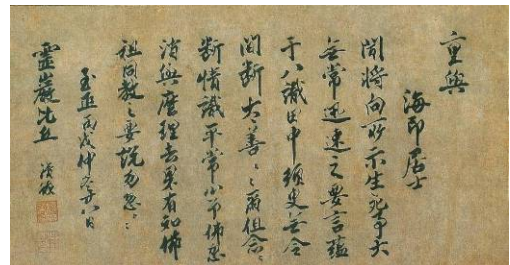
本展示室に展示または写真を掲示している資料の中には、曹洞宗門内では秘伝として、公開するべきでないとする観念を持つ資料もありますが、本企画展に際しては、『正法眼蔵嗣書』の内容についての理解を深めるために掲示・展示させていただきましたこととお断り申し上げます。

了庵清欲印可状（りょうあんせいよくいんかじょう）

縦 30.0 cm・横 56.0 cm／元・至正 2(1346)年／紙本墨書／当館蔵

印可状とは、師が修行者の悟りの境地を点検し、それが円熟した(印可)と判断された際に与えられる認可状。

この印可状は、中国元代の禅僧・了庵清欲(1288-1363)が、弟子の海印居士という人物に与えたとされるもの。了庵清欲は日本に渡航したことはありませんが、当時の中国を代表する禅僧で、彼のもとで多くの日本人僧が修行しました。



了庵清欲印可状

円鏡（えんきょう）

縦 137.2 cm・横 35.3 cm／嘉永 2(1849)年／絹本着色／当館蔵

禅宗寺院では、坐禅修行に専念する期間として、夏冬に 90 日間の結制安居(けっせいあんご)が行われます。結制安居が終わる直前には、修行僧の筆頭である首座(しゅそ)という役職の僧侶に、結制安居を無事に終えた証明として、法幢師(ほうどうし、結制安居の指導者)から円鏡が授けられます。

この円鏡は、嘉永 2(1849)年に信濃貞祥寺(長野県佐久市)で結制安居が行われた際のもの。中央に文殊大師が描かれ、その周りに結制安居に参集した僧侶が円状に列挙され、上部には法幢師直筆の賛、下部には法幢師と首座および禅寺の主な役職の僧侶の名前が記されています。



円鏡

血脈版木 (けちみやくはんぎ)

縦 115.0 cm ・ 横 24.0 cm ・ 厚さ 4.4 cm /

明和 3(1766)年 / 当館蔵

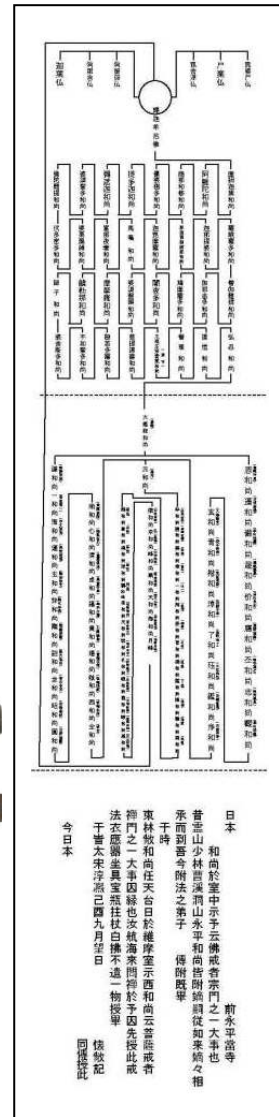
「血脈」は、釈迦牟尼仏からの系譜を示した系図で、曹洞宗では、師から弟子に授けられる嗣法の証として、「嗣書」とともに重視されました。

もともとは手書きで作られましたが、在家の一般信者や、葬儀の際にも授けられるようになると、江戸時代には木版刷りの血脈も作られました。

本資料は、丹後甘露寺(京都府亀岡市)で使われていた血脈の版木で、裏面には明和 3 (1766)年の墨書があります。3枚組から成る版木で、上部に過去七仏および釈迦牟尼仏が記され、中央部の本人に至る系譜の部分は取り外して交換できるようになっています。



血脈版木



版木を刷った時の模式図

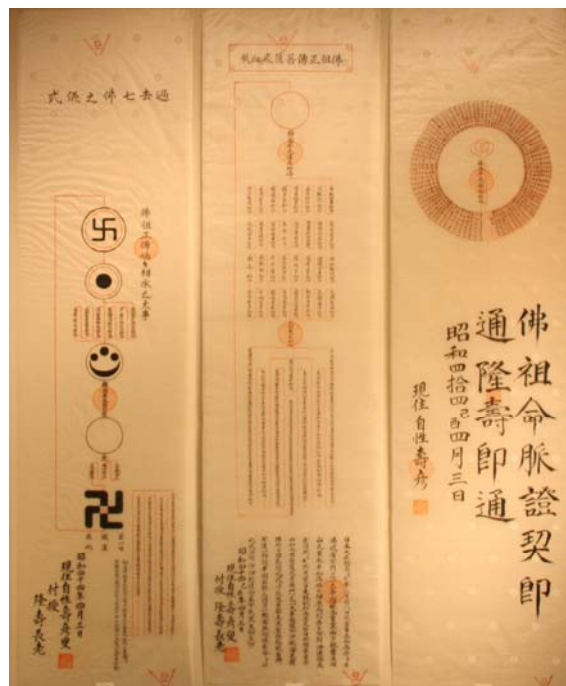
現在の室中三物

(げんざいのしっちゅうさんもつ)

縦 178.0 cm ・ 横 46.0 cm(3点とも) / 昭和時代 /

絹本墨書 / 個人蔵

曹洞宗では、「嗣書」(ししよ)、「血脈」(けちみやく)とともに「大事」(だいじ、宗意の秘奥を図示したもの)を加え、「室中三物」(しっちゅうさんもつ)と呼び、嗣法の証として重要視されています。室中三物の形式は、江戸時代頃に整えられ、現在の僧侶にも授けられています。



現在の室中三物

大事

血脈

嗣書

企画展示室4 法語と頂相～嗣法の標準にそなふ～

道元禅師はまた、『嗣書』の中で、「頂相壺幅・法語壺軸を懇請して嗣法の標準にそなふ……末法悪時、かくのごとき邪風あることを。」と述べ、嗣法と嗣書の一なる真義に反して、近年では、実際に師より嗣書を授けず、師の法語と頂相だけを手に入れて嗣法の証とする弊風があることを批判しています。

しかし、法語や頂相も嗣書に次いで重要なものとして考えられていたことは確かであり、後世には師を敬慕するものとして用いられるようになり、現在では禅美術の上で高い評価を得ています。企画展示室4では、嗣書とともに、嗣法の際に重視されてきた法語や頂相を紹介します。

法語（ほうご）

法語とは、仏法の道理を示したことばです。修行僧に修行の心得を示したもの、一般信者に対して仏法の要諦を示したものなどがあり、また師が弟子に法を授ける(付法)の際にも、漢詩文の法語が与えられました。文体も和文や漢詩文などがあり、漢詩文の法語は偈(げ)とも呼ばれます。

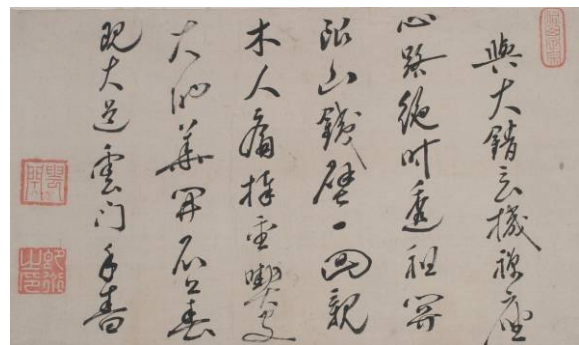
ここでは、付法の際に用いられた法語(付法偈)を紹介します。付法偈もまた、師から弟子へ仏法が伝えられる際に用いられたものですが、道元禅師が『嗣書』の中でいう、師から授かる法語とは、付法偈のような法語に近いものと思われま

雲門即道法語(付法偈)（うんもんそくどうほうご）

縦 27.0 cm・横 56.9 cm／江戸時代(18世紀)／紙本墨書／本学図書館蔵

雲門即道(1691-1765)は、江戸中期の曹洞宗の僧侶。摂津大道寺(大阪府大阪市)3世などを務め、大和世尊寺(奈良県大淀町)を開創しました。

この付法偈は、当時大道寺にいた雲門即道が、弟子の大錯玄機(だいさくげんき、?-1769、後に世尊寺3世となる)に法を付与した際に贈ったものと思われます。最初に「与大錯玄機禅座(大錯玄機禅座に与う)」(※禅座は禅の修行者の意)と記され、七言絶句の偈が記されています。



雲門即道法語

大応知有法語(付法偈) (だいおうちゆうほうご)

縦 27.0 cm・横 41.7 cm / 天明 8(1788)年 / 紙本墨書 / 当館蔵

大応知有(?-1790)は、江戸中期の曹洞宗の僧侶。摂津仏眼寺(大阪府豊中市)3世、河内龍光寺(大阪府大東市)11世などを務めました。

この付法偈は、当時龍光寺にいた大応知有が、智旭禅座(未詳)という修行者に法を付与した際に贈ったものと思われます。七言絶句の偈の後に記されている「経山」は、龍光寺の山号「経寺山」を指し、末尾に「付智旭禅座(智旭禅座に付す)」とあります。



大応知有法語

頂相 (ちんぞう・ちんそう)

頂相とは、禅僧の肖像画のことを指します。禅宗では、師の肖像を弟子に与えることで、相伝の証とする習慣が生まれ、後には祖師の遺徳をたたえたり、敬愛の念を示すものとして頂相が描かれました。

頂相では、絵画の技巧的な面よりも、描かれた人物(像主)の人格的・精神的な面が重視され、独特の禅文化・禅林芸術を形成しました。

頂相は元来、右向きか左向きの構図で描かれてきましたが、江戸時代には、新たに伝来した禅宗・黄檗宗の影響を受け、黄檗様式と呼ばれる正面向きの頂相が描かれました。

1階展示室B4の「独庵玄光頂相」は、黄檗様式の頂相の代表的作品です。

真巖道空頂相 (しんがんだうくうちんぞう)

縦 120.6 cm・横 56.7 cm / 室町時代(16世紀) / 絹本着色 / 当館蔵

像主の真巖道空(1374-1449)は、室町時代の曹洞宗の僧侶で、近江洞寿院(滋賀県余呉町)2世。

本頂相は、享徳2(1452)年に洞寿院3世の川僧慧济(せんそうえさい)により賛が記されましたが、原本は、享禄2(1529)年に兵乱で焼失してしまい、のちに8世の台英是星(だいえいぜせい)が、真巖道空の百回忌を機に元の状態に復元し、川僧慧济の賛を写して再作成されたものです。その詳細な経緯が、像の上部に記され、美術資料としてだけでなく、頂相の成立過程を示す資料としても貴重です。



真巖道空頂相

清巖宗渭頂相（せいがんそういちんぞう）

縦 57.4 cm・横 20.5 cm／慶安元(1648)年／紙本着色／当館蔵

像主の清巖宗渭(1588-1661)は、江戸初期の臨済宗の僧侶で、大徳寺 170 世などを務めました。

本頂相は、慶安元(1648)年、61 歳の時の姿。上部には、「私(清巖宗渭)に仕え、時折茶を給仕する玉置氏の 9 歳の童子がいた。玉置氏はある日、画工に命じて私の肖像を描かせたので、戯れの言葉を(賛に)記し、童子を泣きやませた。」と本頂相が描かれた経緯が記されています。



清巖宗渭頂相

展示資料一覧

展示場所	資料名	年代	所蔵
企画展示室 1 道元禅師真筆『正法眼蔵嗣書』 ～50年ぶりの発見～	正法眼蔵嗣書	寛元元(1242)年	当館
	正法眼蔵嗣書の外箱	江戸時代	当館
	法華玄義釈籤問答抄	鎌倉時代(13世紀)	広徳寺
	面山瑞方の極め書き	宝暦 13(1763)年	広徳寺
企画展示室 2 祖師のすがた ～佛佛かならず佛佛に嗣法～	畠山牛庵の折紙と添状	寛文 3(1663)年	当館
	禅宗祖三国伝東歴代御真影	明治 34(1902)年	本学図書館
	芦葉達磨図 卍山道白賛	江戸時代(17-18世紀)	当館
企画展示室 3 嗣法の証明 ～佛の印証をうるとき～	了庵清欲印可状	元・至正 2(1346)年	当館
	円鏡	嘉永 2(1849)年	当館
	血脈版木	明和 3(1766)年	当館
	現在の室中三物	昭和時代	個人
企画展示室 4 法語と頂相 ～嗣法の標準にそなふ～	雲門即道法語	江戸時代(18世紀)	本学図書館
	大応知有法語	天明 8(1788)年	当館
	真巖道空頂相	室町時代(16世紀)	当館
	清巖宗渭頂相	慶安元(1648)年	当館